

## ハイネとベルネ

— ハイネの「ルートヴィヒ・ベルネ覚書」をめぐって (1) —

柿原正幸

### 要 約

ベルネを中心とする左派の批判を受けていたハイネは、ベルネの死の三年後、いわば自己弁明のため、「ルートヴィヒ・ベルネ覚書」を書いた。それは、1830年パリ7月革命前後の同時代を描きながら、ベルネと対立する自己の立場を明らかにする試みであった。

今日「覚書」は、ベルネより優れたハイネの革命的展望を表すものとして評価されているが、これはハイネの言い分を額面通りに受け入れて、ベルネが蔑ろにされていると思われる。ベルネが果たした役割を評価してこそ、「覚書」全体の公正な理解が得られるだろう。そのためには、「覚書」以外に表れた二人の対立的をくわしく検証する必要がある。

#### (一)

ハイネとベルネは最終的には、仲たがいの事になったが、後世のものが見れば、協力できるような共通点も多くある。二人ともライン地方で育ち（ベルネは1786年5月6日フランクフルトで、ハイネは定説によれば1797年12月13日デュセルドルフで生れた。）フランス革命後のフランス軍占領によるユダヤ人の解放、ナポレオン失却後の反動というめまぐるしく変わる浮沈を身をもって体験し

た。二人とも、フランスでの革命、それに続くナポレオンの帝国、王政復古、1830年の7月革命に至る近代ヨーロッパの誕生の歴史に深く係わり、そこから新しいドイツが進むべき道を模索した、二人の歴史的、政治的見解は基本的な点では一致するところがあったと思われる。なによりも、二人は「若きドイツ」のリーダー的存在と見られていた。少なくともドイツの反動勢力は、二人の革新的な文筆活動がリベラルな人々に大きな影響を与える

ことを危惧していた。メッテルニヒが1835年10月、連邦議会のオーストリア代表に送った指示は、そのことをはっきり示している。「若きドイツの名のもとに台頭し、ハイネとベルネを模範として活動している文学上の一派に我々は重大な関心を抱いている。この一派の目的は、小説あるいは詩によってドイツと広汎な読者層に影響を及ぼし、すべての啓示宗教や自然宗教を転覆し、野卑な肉欲を神聖化することにある。この神なき輩は、ドイツにおける宗教的、道徳的生活の規範を破壊すれば、国家を支える政治機構も自から解体すると考えている。ドイツの諸公は、自らとドイツ民族の名誉にかけて、かくの如き毒草が蔓延し、誉れ高きドイツ文学の沃野が乱され、わが民族から道徳的尊厳と思想家の最高の財産が、計画的に思いのまま奪われるのを許してはならない。<sup>(1)</sup>」

1830年のパリ7月革命が契機となってベルネは1830年9月にパリに移住し、年来の女友達であるシャネット・ヴォール宛の書簡という形式で「パリ便り」を書き始めた。ハイネは、その9ヶ月後1831年5月にパリに到着し、7月革命後の「フランスの状態」についてアウクスブルグ一般新聞に記事を送り始めた。パリ移住前の二人の間は緊密ではないにしろ、一応お互いを認めあう友好的なものであった。1826年5月にハイネは献辞を添えて自著「旅の絵第一部」をベルネに送っているし、1827年10月、ハイネはコッタ書店と契約をかわし「政治年鑑」を編集するため、ミュンヘンへ行くが、その途中フランクフルトの

ベルネを初めて訪問し、わずか三ケ日間であるが好意的なもてなしを受けている。この時ハイネはベルネにハンプルグの出版社カンペに紹介し、ベルネはハイネをフランクフルトのユダヤ人ゲッターを案内し、自宅にハイネを招待するなどしている。

ところがパリ移住前後を境にして、二人の関係は急速に悪化して行った。さきにパリへ行ったベルネは、ハイネを迎えて共同出版を行う具体的な計画を抱いていた。ジャネット・ヴォール宛の私信でベルネは期待を込めて語っている。手紙の日付は1831年2月3日、パリに移って五ヶ月後である。

「私が抱いている最も新しくてすばらしい文学上の計画のことを話そう！カンペにも知らせたが、私は雑誌をスイスで発行したい。ハイネが私に協力してくれることを望んでいる。ハイネ自身が私に返事するだろうとカンペは言ってきた。……要はハイネが私に協力してくれることだ。ハイネと私以外には、赤い血のかよった使いものになる人間は、のろまで黙りこくったドイツ人の中にはいない。ドイツの検閲から我々を守ってくれるような、雑誌と単行本の長所を合わせ持った文学上の企画も別に考えている。それは、私とハイネが往復書簡を交わし、3ヶ月ごとに本にするというものだ。……書簡の中で、時事的な問題、政治、芸術、学問あるいは旅についてお互い意見を交換する。お互い自分流の書き方で書きたいことを書く、ただ一つ、一方が触れた問題点について、相手も意見を述べるという形にする。こうすればお互いに刺激を

## ハ イ ネ と ベ ル ネ

受ける。……この計画をどう思いますか、ハイネと話し合って見て下さい。私はきつとうまく行くと思います。<sup>(2)</sup>」

ベルネはこの企画をなかなかあきらめきれなかったようだ。ハイネがこの企画についてどう考えていたか、どこにも述べていないのははっきりした理由は分からないが、結局相手にしなかった。熱烈な期待が裏切られた失望が手伝ってか、ベルネのハイネに対するわだかまりは大きくなって行く。1831年9月26日二人はパリで再会するが、その時ベルネはハイネの性格について決定的な偏見を抱いたと思われる。何か具体的な問題について意見の対立があっけいさかいが起こったわけではないが、云ってみれば持って生れた性格上の宥和しがたい対立がベルネの目を曇らせたのであろうか、再会の翌日ベルネはヴォール夫人にハイネの印象を次のように知らせている。

「昨日の午後若い男が私のところへやってきました。その男は入るなり笑いながら両手をさしのべて来ました。私には誰だか分かりませんでした。ところがそれがハイネだったのです。彼のことを昨日一日中考えていました。一週間前ブローニュから帰って来たそうです。……イギリス女に惚れちゃって、なんて言いました。第一印象をやみくもに信じてはいけませんが、……ハイネは私の気に入りません。彼と15分も話さないうちに、私の心の中の声がつぶやくのです。こいつには魂(Seele)ってものがないのじゃないかって。……魂とはなにか私自身にもよく分かってないのですが、……それは、目に見えるもの、

心、精神、美の背後にあって、それがなければ、心、精神、美も無に等しい、そういう何かです。……ハイネにとって神聖なものは何もありません。彼は真理の中でも美しいところしか愛していません。彼には信仰がありません。……雑誌を共同出版する話を持ちかけましたが、ハイネは取りあいませんでした。…ハイネは下品でふしだらな男といううわさがあります。……初めて気がつきましたがハイネは女好きのするようななかなかの美男子です。しかし中身は空っぽです。全くの空っぽです。…」<sup>(3)</sup>

私信の中とはいえ、これはきわめて辛辣な言葉である。わずか前までは共同を期待していた人間と久しぶりに再会した日に、何が原因でハイネに対する人間的評価が激変したのだろうか。ヴォール夫人に宛てたベルネのその後の手紙を読むと、ハイネに対する悪感情が次第にとりかえしのつかない根深いものになって行った様子が分かる。ベルネの手紙はハイネの人間的な弱点の一部を裏面からとらえているのかもしれないが、それを繰り返して、繰り返し書きつらねているのを見ると、けんかの相手はけんかしたことを忘れてしまっているのにいつまでも拘っているしつこさ、ハイネとの関係を気持の上で清算できずにいるベルネ自身のいらだち、他人のノンシャラントな生活を絶対寛恕できないベルネの道徳的な潔癖さというより偏狭さが読みとれる。1831年10月13日の手紙を引用してみよう。

「またハイネの話をします。ハイネの悪口を云って私が喜んでいるなど考えないで下

さい。作家、従って人間としてのハイネに興味を持っているのです。ハイネについての他人の意見や私自身が彼について観察したことを集めています。ハイネについての収支報告を自分ひとりでするのは退屈ですから、彼についての情報を順次報告します。作品の中にも表われていますがハイネみみたいな弱い性格の人間はパリでは完全に墮落するでしょう。……メッテルニヒがパリの娘を全部くれれば、自分を買収できるとハイネは人に言ったそうです。ハイネのようなふしだらな人間に私は書物の中でも現実でも会ったことはありません。だから心理的にも私には説明がつかえません。下品な情慾というやつにはときどきお目にかかります。しかし自分のやったふしだらな行跡を何か美しいことのように得々とおしゃべりをする若い人間はめったにいません。ロマンチックな愛はいつも羞じらいがちで寡黙なものです。ハイネときたら昼も夜も不潔な街の女たちの後を追っています。……あるドイツ人はハイネに注意するよう私に警告してくれました。ハイネはプロシャのスパイの女衒をしているというのです。……<sup>(4)</sup>

このような二人の性格的な行き違いに加えて、二人のいわば世界観の違いが文筆活動を通じて表面化してきた。1830年の7月革命後多くのドイツ人がパリへ亡命してきた。大半が職人や労働者で、多くが、1789年のフランス革命当時のジャコバン派流の過激な共和主義を信奉し、ドイツにも急激な政治革命が起こることを期待してさまざまな画策を行っていた。ベルネはそれらの人々に高潔な共和的

愛国主義者と見なされ、次第に領袖的な地位に祭り上げられていった。一方ハイネも7月革命に感激してパリへ自ら求めて亡命して来たが、いかなる政治的党派にも加担しなかった。もちろんハイネも7月革命の影響がドイツに及ぶのを期待していた。1832年3月1日コッタ宛にハイネは書いている。「遅かれ早かれドイツにも革命が起こります。観念の上ではすでに起きています。ドイツ人は観念を、たとえその異文といえども放棄したことはありません。何ごとにも徹底したこの国では、どんなに長くかかろうとも万事が最後まで遂行されます。<sup>(5)</sup>」しかしハイネは、ベルネ流の共和主義達のように王制を倒して共和制をしくという単なる政治的領域に革命を限定することに同意できなかった。革命の本質は単なる政治体制の変革だけにあるのではなく、哲学、宗教、芸術等の人間の文化的生活を抱摂する問題として広く歴史的に理解すべきと考えていた。こうしてハイネの関心は、時事的政治活動から、フランス革命やドイツ哲学の歴史的研究へと重点が移って行った。1833年7月16日、友人フェルンハーゲンに書いている。「現実の政治問題で扇動的な役割を果たすつもりは毛頭ありません。そんなことをしてドイツの人々を今すぐ動かせるなんて考えてもいません、目下そんなことより芸術や宗教や哲学の研究に没頭しています。<sup>(6)</sup>」ハイネは自分のすべきことは過激な政治活動ではなく、ドイツ人とフランス人の間に文化的かけ橋を築くことであると思い始めた。1833年4月、友人フリードリヒ・メルケルにその確

信を述べている。「私は例の雑誌を足場にして、ドイツ人の精神生活をフランス人に知らせるため、できる限りのことをするつもりです。これが目下の私の任務です。この両民族を宥和に導くのが私の平和的使命です。このことを一番恐れているのは貴族達です。民族的な偏見、愛国主義的偏狭さが取り除かれれば、抑圧の最強の道具も失われるでしょう。私はいわばコスモポリタニズムの体现者です。結局これがヨーロッパの普遍的思想になるでしょう。だから、過去の遺物であるドイツの民族主義者、この死すべき定めの人間達より、私の方が未来を持っていると確信しています。<sup>(7)</sup>」このようなハイネの態度は、ベルネやドイツのリベラル派の人々から、革命からの離反、変節と見られた。1832年1月から「アウグスブルグ一般新聞」にハイネのパリ通信が掲載されたが、これがまとめられて1833年に単行本「フランスの状態」として出版されると、ベルネはただちに批判の筆を取った。1833年2月25日付の「パリ通信第109信」である。その中でベルネは私信ほどの激しさはないが、ハイネの言動の定見のなさ、詩人的な気まぐれを皮肉っぽくやり玉に上げている。少し長いが要点を引用して見る。

「ハイネの〔フランスの状態を正当に評価せよと言われたら？ ととてもそんなことはできない。この本を読んだとき蠅のように頭にまとわりついた不快感があっちこっちとついてまわりいらいらして、自分の判断の公正さはおろか、判断の正直ささえ保証できない。……三百年にわたるオーストリアの非人間的政

治を高貴な忍耐力があると褒めたり、バイエルン王を最も気高い才気に富んだ君主と持ち上げたり、まるでおこりに雇ったように、フランス王の評価を日によってくるくる変えたり、コレラ流行の折パリに残ったロスチャイルドの紳士連を勇敢で立派だと見て、ドイツ人亡命者達の無償の奉仕を笑い草にしたり、意気地がないくせに自分を堅固な人間という、そういう訳の分からないことを言う人間しかハイネの本の謎は理解できないだろう。……子供の遊びや若者の情熱は大目に見れるが、しかし激しい戦いの日に蝶を追う子供が戦場へ迷い込んできて我々の足手まといになったら、また苦悩に打ちひしがれた日に教会で神に祈る我々のかたわらに若い伊達男がきて美しい娘に秋波を送るならば、我々の哲学や人間性に関係なく憤るのは当然だ。ハイネは芸術家であり詩人だ。ただ彼自身だけがそれを認めようとししない。詩人以外のものになろうとするから自分を見失ってしまう。……彼が真理を述べても人を説得しえない。彼は真理の中でも美しいものしか愛していない、ドイツの自由が美しい花を咲かせたらハイネはそれを愛するかも知れない。しかし今はきびしい冬で肥料にまみれているから、彼をそれと認識できず軽蔑する。……軟弱で享樂的なハイネはバラの花びらが落ちただけで眠りを乱される。ゴツゴツしたコブのある自由の木の下でなんで彼が安眠できようか。離れているがよい。陰阻な道を歩けば疲労困憊するような人間は出歩かなければよい。矛盾に会えば頭が混乱する人間は思考しないがよい。虚構の

ない真実、しみのない美があるだろうか、茶番を伴わぬ崇高があるだろうか。自然が詩を自ら作ことはめったにないし、韻を踏むことは決してない。自然の散文性、非韻文性が不快なものは、詩に向えばよい。自然は何ごとにも共和主義的に力を及ぼす。……我々哀れむべき人間は、幸運にも自然から一つの背中しか授けられていない。だから一つの方向から襲って来る運命の打撃しか恐れる必要はない。しかしハイネは二つの背中を持っている。彼は貴族主義者と民主主義者の攻撃を恐れなければならない。彼は同時に行きつもどりつしなければならないのだ。民主主義者に気に入られるため、ハイネは言う。絶対主義に勇敢に立ち向っているためドイツの貴族主義の一派が自分を中傷し迫害すると。貴族に気に入られるため、彼は言う。自分はジャコパンの過激派と勇敢に戦う民主主義者であると。……<sup>(8)</sup> ベルネの言葉がどこまで真実であるか判断するのは今後の課題であるが、少くとも一つだけ、ハイネの立たされは立場を適確に言い当てている。すなわち、ハイネはリベラル派からは変節者と見られ、ドイツの封建的支配層からは危険な扇動者と見られるジレンマに立たされたことである。

二人の不和が解消されぬまま、ベルネは1837年2月12日夕刻パリ亡命のうちに死んだ。2月18日、パリのペールラシェーズ墓地に葬られた。葬儀には悪天候にもかかわらずドイツ人亡命者やフランス人の同志など3,000人あまりが参加した。ハイネは風邪のため出席しなかった。そして三年後1840年7月に、自

分の立場を弁明するため、「ルートヴィヒ・ベルネ覚書」を発表した。

## (二)

「覚書」は発表当初、ハイネの期待に反して、スキャンダラスな反響を引き起した。それは、ベルネの死後自己の優位性を主張する傲岸なものと思われ、またベルネとその文通の相手ヴォール夫人、彼女の夫との三人の関係を著しく中傷する部分を含んでいたため、ベルネを崇拝するリベラル派の読者から痛烈な非難を受けた。しかし今日では、個人的なベルネ誹謗を度外視すれば、ベルネの感傷的道德主義、時代遅れの過激な共和主義を越えるハイネのすぐれた革命観を表明したもので、または政治的人間であるベルネには理解できなかったハイネの詩人としての自律性を主張するものとして評価されている。しかしその場合ベルネの真価が不当にないがしろにされているように思われる。それは、裁判において判事が検事の論告だけを取り上げ被告の有罪を宣告するのに等しくはないだろうか。

「覚書」は極めて複雑な書物である。形式に関して言えば、フィクション、事実、伝記、論争、エッセーなどの要素が洗練された散文でみごとに合されており、また内容に関して言えばそこで取り扱われているテーマは、脈絡あるが如くまたなきが如く多岐にわたり渾然とした一体をなしている。これら形式と内容の複雑なからみを読み解いて行くことが、ハイネとベルネの位置を確め、ひいては「覚書」全体を理解するのに不可欠であろう。

「覚書」の最初の部分で、ハイネは、自分とベルネの対立の原因を分析する道具として一つの二元論を仮定として立てる。これがいわば通奏低音とし作品全体を貫いている。ハイネ自身の言い分を聞いて見よう。

「ゲーテやその他の作家についてのベルネの意見を聞くと、彼の持つナザレ的偏狭さが言葉のはしばしに現われていた。ナザレ的というのは、私にとってユダヤ的あるいはキリスト教的というのと同義であるが、決してある信仰を指しているのではなく、人間の気質を指している。ユダヤ教的人間と言いキリスト教的人間と言ってもこれは私には同義語で、ヘレネ的人間に対立する。もちろんヘレネ的人間も一定の民族を指すものではなく、先天的であるいは後天的精神の性向、物の見方を指す。この点で私は言いたい。人間はすべて二つのタイプに分けられる。禁欲的、偶像破壊的で魂の純化だけを求めるユダヤ教的人間と、生を楽しみ、才能をのびのびと発展させる現実的なヘレネ的人間とに。ドイツの牧師の家庭で育ったヘレネ的人間もいたし、アテネで生れ、テーセウスを祖先に持つユダヤ教的人間もいた。<sup>(9)</sup>」

ハイネのこの仮設が妥当するか否かは別の問題であるが、もちろんハイネは、ベルネを「ナザレ的人間」、ゲーテと自分自身を「ヘレネ的人間」と規定する。そしてベルネのゲーテに対する反感も「ナザレ的人間」の偏狭さに由来するとされ、ゲーテについての解釈の違いが二人をへだてる分岐点として提示される。

ベルネのゲーテに対する敵意、反感は著作の随所に見られるが、それは最初からのものではない。フランクフルト時代の1817年、ベルネは生涯の友となるジャネット・ヴォール夫人と相知るのであるが、彼女への手紙に「ゲーテのファウストにならいて (mit Goethes Faust)」と題する自作の詩を添えている。<sup>(10)</sup> それは自分の行為、苦悩をファウストのそれになぞらえ、それをつつむ女性的な清澄な柔和さを相手のうちに見い出すという内容の断片的なものであるが、これはベルネがまだゲーテを敵視していなかったことを示している。1818年5月、ベルネは自分の主宰する雑誌「秤」にゲーテの寄稿を依頼するがゲーテの返事は得られなかった。そして1819年頃よりゲーテ批判の言葉が激しくなっていく。ベルネのゲーテ批判はほぼ二つの点に集約されるだろう。すなわちゲーテの果たした政治的役割の反動性に対する弾劾と、ゲーテの冷淡さに対する論難である。1830年頃に書かれたと思われる「ゲーテの西東詩集評釈について」の中でベルネは言う。「唯一人のドイツ人ゲーテのほかに、人間の性質の中に潜む奴隷性を賛美し、高貴な人なら悲しみつつ隠すようなことを億面もなく曝す恥知らずの人間がいただろうか、専制君主に媚びる詩人はいた。しかし専制制そのものを賛美する詩人はいなかった。<sup>(11)</sup>」

総じて言えることは、ベルネはゲーテの一切を自分に敵対するものとして否定しさろうとした。それに対してハイネは最初からゲーテと自分の違いを意識しながらもゲーテの作

品とわたり合うことによって自分の位置を確かめ、ゲートを乗り越えようとした。ゲートの果した役割を視野に入れながら、二人のゲートについての見解の違いを比較検討する必要がある。

つづく

## 注

- (1) Klaus Briegleb u. a, Sämtliche Schriften Heinrich Heine, Ullstein Werkausgabe. Band, 8, p. 651
- (2) Inge u. Peter Rippmann, Ludwig Börne Sämtliche Schriften, Joseph Melzer Verlag. Band 4, p. 1299
- (3) ibid. Band 5, p. 11
- (4) ibid. Band 5, p. 34
- (5) Heinrich Heine Säkularausgabe, Band 21, p. 31
- (6) ibid. Band 21, p. 58
- (7) ibid. Band 21, p. 52
- (8) Ludwig Börne Sämtliche Schriften, Band 3, p. 809
- (9) Heinrich Heine Düsseldorfer Ausgabe Band 11, p. 18
- (10) Ludwig Börne Sämtliche Schriften, Band 4, p. 175
- (11) ibid. Band 1, p. 1210

## Heine and Börne

-- concerning Heine's "Ludwig Börne. Eine Denkschrift" --

Masayuki KAKIHARA

In response to the attack by the oppositional clique with its leading spokesman Ludwig Börne, Heine published Ludwig Börne. Eine Denkschrift. It was an attempt at self-justification. Heine tried to clarify his standpoint by portraying Börne against the background of the contemporary history of the 1830s. Today the book is praised as a statement of Heine's vision of revolution which is considered superior to Börne's narrower one. In this favourable interpretation of Heine Börne seems to be neglected despite his contribution to the revolutionary movement in the thirties. For a proper understanding of the book, it is necessary to take it into consideration what role Börne played in enlightening the German public.